The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

仏典結集で収載されなかった *Nandopananda* [*-nāgarājadamana*] と北伝資料について

林　隆嗣

1．上座部の外典文書 *Nandopananda*　紀元5世紀のパーリ註釈文献 *Samantapāsādikā* (Sp) には「三つの結集で収載されなかった教法」というカテゴリで，現行パーリ三蔵に含まれない6文書が列挙されている[1]．正典から除外された「外典」とみなしうるこれらのうち，*Nandopananda* は，*Visuddhimagga* (Vism 398–401) などの挿入話からテクスト全体が知られる唯一の例であり，パーリ註釈文献では "Nandopanandadamana" や "Nandopanandanāgarājadamana" とも呼ばれている．14世紀のスリランカ人 Ānandaśrī らによる蔵訳経典 *Klu'i rgyal po dga' bo nyer dga' 'dul ba'i mdo* (Nandopanandanāgarājadamanasūtra) (Q no.755, D no.39) は，この Vism の挿話と一致するため，上座部保有の経典であることが判明している．

ナンドーパナンダは汎仏教的に馴染みのある竜王の名であり，北伝仏教文献では常に Nanda と Upananda の2竜（兄弟）として描かれる．釈尊の誕生や般涅槃を始めとして仏伝の様々な場面に顔を出し，八大竜王などの竜王リストには必ず数えられ，また護呪経典や密教でもよく知られている．そしてそのなかに上座部の外典文書と関連する類話も存在する．*Nandopananda*[*-nāgarājadamana*] の内容解明とスリランカ・東南アジアにおけるナンドーパナンダ竜王調伏譚の展開については別に検討したが[2]，本稿では，上記の資料的状況をふまえて上座部と北伝仏教の関連文献を比較しつつ，インドでの物語の普及と受容を明らかにする[3]．

2．漢訳『竜王兄弟経』　まず，支謙訳（または失訳）の『竜王兄弟経』T no. 597, vol.15, 131a9–131c4 という1巻の漢訳経典が存在する[4]．この経典は，上座部文書で「世尊の dhammadesanā (cf. chos bstan pa)」と表現されている箇所が，六波羅蜜を勧奨する内容 (131a15–16: 仏言人当布施持戒忍辱精進禅定智慧) になっているが，この点以外に大乗的要素はない．むしろ舞台設定に始まり内容全体が上座部の伝承とよく一致する．例えば，エピローグでの7日間接待こそ語られないが，アナータピンディカの食事招待という枠物語を有し，さらに，頭上飛行に対する竜王の怒り，天空を鎌首で覆い暗闇にすること (131b1: 以頭覆其上)[5]，比丘たち

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

の問い（須檀）と調伏の名乗り出（愛波）の後で目連を承認する場面も見られる．目連と竜王の戦闘場面を比較すると，順序には違いがあるものの，

①目連が大竜となり，須弥山を7重巻きにする竜王を14重に巻き，鎌首をもたげる（131b11–12）

②互いに煙や火を放つ（131b5–7）

③小さくなり，竜王の耳，鼻，口を出入りし腹に入る（131b8–10）

という3つの場面が共通する．体内外の出入りは順序も一致する．また，*Nandopananda*での“mahiddhiko esa nāgo”に対応する釈尊の台詞（131a24: 此竜大有威神）は北伝類話の中で『竜王兄弟経』だけに見られる．さらに，目連が四神足を自負する場面も本経だけが一致する（131b15–16: 我有四神足当信持行之）．

このように物語の構成要素に関する一致点が多いことから，『竜王兄弟経』は上座部と同系統の経典と考えられる．また，他の北伝資料では「目連 vs. 2竜」のイメージで語られていないが，興味深いことに，本経では目連が「分身」して両竜の体内に侵入する（131b8: 稍前分身入両竜身中……）という細やかな描写が見られる．ただし，本経も含めてナンダとウパナンダという2竜の設定を活かした描写が一切ないため，もともと単竜の物語であったのではないかと思われる．

3．『増一阿含経』　僧伽提婆訳『増一阿含経』T no.125, vol.2, 703b13–704b19(–705b19)（巻第二十八，聴法品第三十六，第五経）にも「難陀優槃難陀」の調伏譚が含まれる[6]．上座部では「外典」であるため，当然パーリ三蔵には対応経がない．ここでは，釈尊の三十三天での母への説法と3ヵ月後の三道宝階降下という有名な物語[7]と連結するために，全体が長大化し矛盾が生じる．つまり，冒頭の「帝釈天の昇天依頼と黙受」（703b13–24）の次に「目連の竜王調伏譚」があり，その後で実際に三十三天に向けて出発する（705b19以降）ので，昇天前に唐突に竜王の頭上を飛行している状況があり，そのことで彼らが空を飛ぶ理由や目的が失われている．そのためこれが嵌め込まれた物語であることは明らかである．

冒頭の舞台設定は，比丘の数も含めて上座部（蔵訳）と一致する（一時仏在舎衛国祇樹給孤独園．爾時釈尊与大比丘衆五百人俱）．ここにはアナータピンダダの聴聞と食事招待という枠はないが，話の展開も構成要素も*Nandopananda*とよく一致する．頭上飛行に対する竜王の怒りが発端であり，パーリ文の“ime hi nāma muṇḍakā samaṇakā”という侮蔑の台詞は，北伝資料群のなかで『増一阿含』だけにある（703b25: 此諸禿沙門）．順に名乗り出る個々の比丘の名は異なる（阿難，大迦葉，阿那律，離越，迦旃延，須菩提，優陀夷，婆竭）が，最後に目連を釈尊が指名すると

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

いう流れも一致する．また，調伏の後，帰依を願い出た竜王を目連が釈尊の許に連れて帰依させるという結末は，『増一阿含』と*Nandopananda*にしか見られない．

戦闘場面に注目すると，上記『竜王兄弟経』とも一致する3つの主要場面がここにも含まれている[8]．一方，目連が14の頭を有する竜に変化するのは独自のイメージである[9]．また，竜王が尾で海面を叩く場面は，目連も応じて対抗戦の1つとなり，『竜王兄弟経』よりも演出が壮大である．但し目連が衆生を害するのは不適切と考えられたのか，彼が生き物たちへの配慮を示して竜王の発した雷電霹靂や大火炎には対抗しないという場面も描かれている．より重要なのは，上座部の*Nandopananda*や『竜王兄弟経』にはなかった第2幕（704b19–705b19）が用意されている点である．そこでは，プラセーナジット王が自らに対して立って挨拶しない二人（両竜）を見て激怒し殺害を命じたことを，竜王が知り，逆に王宮を破壊しようとするが，目連は結跏趺坐して，竜王の降らす雷・暴風雨・瓦石・刀剣などを次々に優鉢蓮華に変えてしまうという話である．ここで竜王は目連の介入を察知して立ち去るだけであり，そもそも調伏は既に済んでいることからも明らかに本来の竜王調伏譚とは別の物語である．

4．『根本説一切有部律』　『増一阿含』と同じく2部構成の「難陀鄔波難陀」竜王調伏譚が『根本説一切有部毘奈耶』波逸提法第82条「入王宮門学処」T no. 1442, vol.23, 866c20–867c19（–868c27）にも存在する[10]．他の広律には見られず，戒条の内容とも関連しないため，ここでも嵌め込まれた物語であると考えられる．

舞台は同じ（仏在室羅伐城逝多林給孤独園）であるが，上述のバージョンとは展開や内容が大きく異なる．シュラーヴァスティーで釈尊の説法を聞いて各地へ修行に出た比丘たちのうち，須弥山に向かった者たちが竜王のせいで体調不良になって戻ってくるというのが事件の発端である．竜王は，釈尊たちの行動とは無関係に当初から須弥山に巻きついて毎日3回「毒気」（cf. mi mthun pa'i rlung）を吐いていて，目連の出撃に至る過程には比丘たちの名乗り出がなく釈尊直々の指名による．調伏に当たっては，竜王の腹中への侵入と雷鳴（867a27–28: 目連即入其腹振大雷霆，cf. des de gnyis kyi ltor zhugs te sprin chen po bzhin du 'brug bsgrags par brtsams）が語られるものの効果的な攻撃とはならず，他の類話の如く鼻や耳を出入りして翻弄する行為とは対応しない[11]．そのため実質的対戦は「目連が巨竜化し，7重に須弥山を取り巻く竜王に巻きついて鎌首をもたげる」場面のみである[12]．『増一阿含』では生類に配慮して雷電霹靂・大火炎には応じないが，漢訳『根本有部律』では竜王を瞋怒させれば閻浮提全体に影響が及ぶであろうことを危惧した目連の

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

戦略で未然に損害を避ける設定である（蔵訳なし）．竜王に対して警告される業報に関する説法（867b16–18）は他に見られず[13]，目連の許での帰依も独特である．

第2幕（867c19–868c27）も『増一阿含』と同様，竜王の不起立に対する国王の憤慨から始まる．しかし，この不起立が竜王の不遜に由来するものではなく，竜王が事前にこの点について世尊に相談（867c27–28：大徳，既見国主合改常儀，我今為敬法坐聴，為敬王起立）のうえ助言を得て，仏法こそを敬って聴聞するために坐していたという事情説明が付されている．また，『増一阿含』では竜王自身が怒って報復を試みるために，せっかくの調伏や帰依と受戒が効果的な意味を持たなくなるが，こちらは竜王の従者（所有部従，部属）たちの行為となっている．このように漢訳『根本有部律』では齟齬が解消され，合理的に整えられている．

さらに「七日」と題する後日譚（868c28–869a20）があり，（アナータピンダダではなく）国王が7日間の施食を行った後日，夜に火事になったため，夜中に灯火を点すことを禁じる法令を制定した逸話が加えられ，最後に，竜王の過去に疑いを抱く比丘たちに両竜の前生譚（869a21–b24）が語られる．蔵訳（Q no.1032：Te 69a3以降，D no.3：Nya 75a4以降）では，王の来訪に始まる第2幕や後日譚「七日」を含まず，竜王の帰依から比丘の疑念と前生譚に直結する（Q：70b8, D：78a6）．

11世紀のKṣemendra作*Avadānakalpalatā*の第33章Nandopanandāvadāna（蔵訳［Q no.5655：Ge 147b4–149a1, D no.4155：Ke 270a1/2–272a5/6］では第34章）は全体で26偈の短編である[14]．須弥山を3重に取り巻いて毎日3回火に満ちた息を（ucchvāsaṃ... kīrṇapāvakaṃ；cf. dug gi dbugs // me yis）吐く両竜のせいで比丘たちは顔色悪く衰弱している（vv.5–7）．それを知った釈尊が目連を派遣する（v.8）．目連が両竜を起こそうとしても目覚めないが，大竜になって締めつけると，目覚め怯えて逃げ出す（vv.9–11）．目連は元の姿で呼び止め，大竜の非存在を明かして恐怖の除去・安心のために帰依を薦め，両竜を釈尊のもとに連れて行く（vv.12–16）．釈尊は法を説き，両竜王の過去を語る．目連と竜王の直接対決が第10偈cd「そのとき［彼は］巨大な竜の姿になってまとめて巻きついた」（tadā mahānāgavapur bhūtvā [sa] samaveṣṭayat；cf. de tshe de ni klu chen gyi // lus su gyur nas yang dag bcings //）という1場面のみである点は根本有部と同じあり，竜王の前生譚を含めて『根本有部律』の系統の焼き直しと思われる．

5．さまざまな経典　*Nandopananda*は対応する漢訳経典と蔵訳経典が現存し，他の仏典に引用された内容から多くの異本の存在が推測できる．例えば，『大智度論』T no.1509, vol.25, 78b11–12には「如降難陀婆難陀竜王兄弟経中説，舎婆提

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

国飢餓」という記述があるが，上の文書のなかで飢饉の逸話を語るものはない．また，別の箇所では結跏趺坐の威力を示す事例として，難陀婆難陀竜王兄弟が舎婆提城を壊す目的で武器や毒蛇の雨を降らせると，坐した目連が花などに変えたというエピソード（300a29–b2）が語られる[15]．これは『増一阿含』と漢訳『根本有部律』に見られる第2幕に相当する．そのうち「結跏趺坐」を明示する前者に近いと推測できるが，降下物は合致しない[16]．そのため，『降難陀婆難陀竜王兄弟経』（*Nandopanandanāgarājadamanasūtra）は，正確にはどの現存文献にもあてはまらない．『大智度論』の作者や引用経典をどう評価するかにも関わるが，上座部ではスリランカの古長老，三蔵チューラナーガ[17]が*Nandopanandadamana*を自説に援用していたというVismの記述を考えると，インドでも紀元前1世紀～紀元2世紀頃には類似経典が広く普及していたのであろう．

最後に中国への経典の伝播を指摘しておきたい．現存する単独の漢訳経典は支謙訳（または失訳）『竜王兄弟経』のみだが，6世紀初頭の宝唱等による『経律異相』T no.2121, vol.53, 75a12–75b7「目連現二神足力降二竜王十七」には「降竜経」の紹介がある．そこでは暗闇の理由を問うのが「私檀（大正蔵は「弘檀」）」，竜退治の名乗り出が「受彼」であり，「須檀」と「愛波」とする『竜王兄弟経』と恐らく一致している．また，目連の巻きつきが3重と14重の2段階である点も共通する．話の要素も進行も『竜王兄弟経』とほぼ同じであるが，内容は簡略で細部に異なる箇所も多い．例えば，竜王が須弥山を7重に巻いている状況や目連が帝釈天の許へ挨拶に赴く場面を欠くこと，竜王が煙と火を吐いた後に目連を1巻きすること，体内外の出入では左右の順が逆であること，五戒を受けて退出した後の場面を欠くことなどの違いがある．但し，同書からの借用と思われる表現や語句が散見されることから現存『竜王兄弟経』の要約（再話）と考えられる．

経録の記述はどうだろうか[18]．『歴代三宝紀』T no.2034, vol.49, 57c17や『開元釈教録』T no.2154, vol.55, 488b18などのように「難竜王経一巻」の訳者を支謙とするなら，彼の訳経活動期間（A.D. 222–253）には中国に伝来していたことになる．同じ『歴代三宝紀』91c18や『開元釈教録』528c8などには求那跋陀羅（394–468年）訳「目連降竜王経一巻」が別経として記録されている．しかしそれら以前，梁の僧祐による『出三蔵記集』T no.2145, vol.55, 6c–7aの支謙訳出経一覧には見当たらず，「難竜王経（難竜経）一巻」が「新集安公涼土異経録」（19a6）という訳者不特定の文書類に分類され，「目連降竜王経（降竜王経，降竜経）一巻」が「失訳雑経録」（23b12）に見られる．法経等の『衆経目録（法経録）』T no.2146, vol.55, 131a

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

19では「竜王兄弟経（降竜王経，難竜経）一巻」も失訳扱いである．

このような状況から現存『竜王兄弟経』の訳者を支謙とすることには疑問があろうが，*Nanda[upananda]nāgarājasūtra（難竜王経）や*Nāgarājadamanasūtra（降竜王経）といった名の経典が6世紀以前，あるいは5世紀半ばには中国で流布していたことは確実である．また，すでにインドで多様化していた状況を鑑みると，別々に伝来・翻訳された複数のバージョンの存在を想定する必要があるだろう．僧祐の当時，「難竜王経（難竜経）」と「目連降竜王経（降竜王経，降竜経）」との両者ともに有本であったことから，確認のうえ別経とされたと考えられる．また，偽経とされる『仏説仏名経』T no.441, vol.14, 211c22も「南無竜王兄弟経，南無降竜王経」というように，2種の経典名を挙げている．

6．まとめ　これまで筆者は上座部大寺派において仏典結集に収載されなかった文書群を調査してきたが，今回のように上座部の正典外文書と同じ趣旨の物語が，他の仏教教団の経蔵（『増一阿含』）や律蔵（『根本有部律』）に確認できたのは唯一のケースである．阿含との関連では，さらに有部の『雑阿含』T no.99 (604), vol.2, 168a1–7にもこの逸話が知られている（本稿注6）．ただし，『増一阿含』はパーリ註釈文献に記載される仏伝などを他にも多く含み，文書の編纂や帰属部派にも問題があり，正典・外典を議論するための材料になりえない．根本有部の律蔵も，この事例のように他部派の律蔵に存在しない説話や伝説を取り込んで最終的に完成したのは比較的遅い時期と思われる．これら北伝仏教の三蔵の場合，上座部のように文書範囲が確定し閉鎖した「正典，canon」の観念をあてはめられるのか疑わしい．おそらく遅れて現れた「仏語」（を装う文書や逸話）の扱いについて，上座部と他の部派には隔たりがあったと考えられる．

インド・スリランカで教団を越えて広く共有されていたナンドーパナンダ竜王調伏譚の起源については簡単に結論づけられないが，現存資料の比較を通じてその中核部分を探ることは可能である．それぞれの類話に多彩な脚色が施されていても，すべてに共通するのは目連が巨大な竜となって須弥山ごと竜王を締め上げる戦闘場面であり，これが物語のなかで最大のハイライトともいえるだろう．この意味で，Vismで神通による身体変化（巨大化）を論議する際に*Nandopananda*を俎上に載せるのは当然であろう．東南アジアの仏教壁画でこの竜王調伏譚が図像化される際も必ずこのシーンにスポットが当たることからも，上座部では一貫してここが物語の主要な見所と捉えられていたことがわかる．

『増一阿含』では，さらに竜王によって天から注がれた雷電や豪雨や瓦礫や刀

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

剣[19]を目連が花などに変えるエピソードが加わり，もうひとつの迫力あるクライマックスを演出する．『根本有部律』の語り手（編者）の興味は，もはや須弥山での対決ではなく，この王宮上空で繰り広げられる目連の奇跡的な能力の方に移っていることは明らかである（戒条との関連か）．『大智度論』が注目するポイントも，目連の神通（結跏趺坐）が竜の攻撃を無力化する第2幕である．

『増一阿含』や『根本有部律』における目連とナンドーパナンダ両竜の対決シーンは，スヴァーガタ（善来）比丘がアシュヴァティールティカ竜を退治する飲酒戒（有部系では波逸提法第79）の因縁譚を髣髴とさせる．また，上座部の外典文書*Nandopananda*の方でも，パーリ律等で語られる飲酒戒（Pācittiya第51）の因縁譚（サーガタのアンバティッタ竜退治）からの影響，さらにウルヴェーラーにおけるブッダの竜退治に遡るモチーフが見られる．このようなナンドーパナンダ竜王調伏譚の形成に関わった素材の解明が次の課題として残されている．

1）Sp IV.742: tisso saṅgītiyo āruḷhadhammaṃ yeva padaso vācentassa āpatti . . . **tisso saṅgītiyo anārūḷhe** pi **Kuḷumbasuttaṃ Rājovādasuttaṃ Tikkhindriyaṃ Catuparivaṭṭaṃ Nandopanandan** ti īdise āpatti yeva, **Apalāladamanan** pi vuttaṃ, Mahāpaccariyaṃ pana paṭisiddhaṃ.
2）拙稿「『清浄道論』に挿入された目連の竜王退治物語――ナンドーパナンダ（ナンダウパナンダ）の調伏――」『こども教育宝仙大学紀要』5，2014，pp.823–816および「仏典結集で収載されなかったNandopananda[-nāgarājadamana]――上座部における外典文書の形成と展開――」『パーリ学仏教文化学会』28，2015（予定）．　3）先行研究としてはDorothy Fickle, "The Story of Nandopananda," *Adyar Library Bulletin* 51, 1987, pp.327–47が挙げられる．　4）文献情報や研究状況については菅原泰典『経集部小経解題』自費出版，2000，p.133参照．　5）但し，気を吐いて雲・霧を起こしたからという理由も重なっている（「瞋恚作変吐気為雲故」，「吐気出霧故」）．　6）赤沼智善『仏教経典史論』法蔵館，1981，pp.37–38では，『増一阿含』の大乗的色彩の事例として，この竜王調伏のエピソードが『大宝積経』に含まれる経説かと疑問符つきで示されるが，『大宝積経』T no.310, vol.11, 75c17–19では目連の二大事跡に言及するだけで物語を含まない．その点では，『ジャータカ註』や『大智度論』やアショーカ王伝（*Divyāvadāna*，『阿育王伝』，『阿育王経』，『雑阿含経』）も同様なので，この例は当てはまらない．　7）Cf. Vism 391, *Dhammapada-aṭṭhakathā* III.224；『雑阿含経』T no.99（506），vol.2, 134a–c, etc.
8）703c21–25：爾時，難陀優槃難陀竜王遶須弥山七匝，極興瞋恚，放大煙火．是時，目連自隠本形，化作大竜王有十四頭，遶須弥山十四匝，放大火煙．当在二竜王上住．704a 11–14：是時，目連即化形使小，便入竜口中，従鼻中出．或従鼻入，従耳中出．或入耳中，従眼中出．以出眼中，在眉上行．　9）タイのBuddhaisawan Chapelなどの壁画では，目連や竜王が7頭を有する例がある．　10）『根本説一切有部律』「薬事」にも言及されるが，ここでは釈尊による調伏になっていて，調伏場面は語られない．八

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

尾史『根本説一切有部律薬事』連合出版，2013，pp.73–74（cf. 309）参照．　11）867a 27–28：目連即入其腹振大雷霆，睡仍不覚．Cf. sprin chen po bzhin du 'brug bsgrags par. 12）867b2–3：即化作竜身大彼三倍，身遶二竜周囲七匝，挙首而住．Cf. des klu chen po'i lus kyis ri'i rgyal po ri rab la lan bdun dkris te steng du gdengs ka chen po byas te 'dug pa dang. 目連の巻きつき回数は他の類話とは異なる．　13）上座部では 12 世紀後半の Guruḷugōmī 作のシンハラ語仏伝文学 *Amāvatura* 参照．　14）類話の存在は中谷英明先生にご教示いただいた．　15）さらに 221a26–27 の「是人瞋恚多，為増瞋恚得解脱，如難陀……」も本経と関連するか．　16）『十誦律』T no.1435, vol.23, 120c17 には竜が毒蛇を降らす例がある．　17）Kūṭakaṇṇatissa 王（在位 B.C. 41–19 年）と同時代．森祖道『パーリ仏教註釈文献の研究』山喜房仏書林，1984，p.395 参照．　18）林屋友次郎『経録研究』前篇，岩波書店，1941，pp.1068–1071 参照．諸経録の比較一覧については小野玄妙編『仏書解説大辞典』別巻「仏教経典総論」，大東出版社，1986，p.49，109. 19）Sp I.65 には，竜王が煙と火だけでなく**剣の雨**を放つ（sayam pi dhūmayati pajjalati pharaṇavuṭṭhiyo vissajjeti）場面もあるが，もともと上座部では竜に降雨のイメージが伴わない．

〈使用テクストと略号〉

Avadāna-Kalpalatā of Kṣemendra. Volume I. Ed. P. L. Vaidya. Darbhanga: The Mithila Institute, 1959. パーリ・テクストは Pali Text Society 版を使用した．略号は慣例に従った．

〈キーワード〉　ナンドーパナンダ，『竜王兄弟経』，『増一阿含経』，『根本説一切有部律』，*Avadānakalpalatā*

（こども教育宝仙大学教授，Ph.D.）

NII-Electronic Library Service